

# 目に見える結果と、目に見えない結果

フレデリック・バスターア、1850

- [序言](#)
- [I. 壊れた窓](#)
- [II. 軍隊の解散](#)
- [III. 税金](#)
- [IV. 舞台劇と芸術](#)
- [V. 公共事業](#)
- [VI. 仲介者](#)
- [VII. 規則](#)
- [VIII. 機械](#)
- [IX. 借金](#)
- [X. アルジェリア](#)
- [XI. 倅約と贅沢](#)
- [XII. 労働する権利、利益を得る権利](#)

## 序言

経済の分野において、ある行動、習慣、組織、法律は単一の結果を生み出すだけでなく、いくつもの結果を生み出す。それらの結果のうち、最初のものだけがその場で生み出される。それはその要因とともに姿を現すので、目に見ることができる。他の結果は徐々に発生し、姿を見せることはない。もし予測できるなら、我々にとってはよいことなのだが。無能な経済学者と優秀な経済学者の差の全てはここにある。前者は目に見える結果を扱い、後者はそれだけでなく、予測する必要のある結果をも扱う。この違いは非常に重要だ。なぜなら、好ましい結果がその場で生まれる時はいつも必ず、後々に悪い影響を及ぼすし、その逆もまた真であるからだ。故に、無能な経済学者は、後で巨大な悪影響が待ち受けていようとも、小さな現実の善を取り扱い、真の経済学者は、たとえ今は小さな善を及ぼしていても、やがて大きく育つであろう善を追求する。

医療、芸術、道徳の研究においても、実は同じことが言える。ある行いにおいて、最初の効果が心地よければよいほど、しばし後々に苦い経験を味わうことになる。放蕩、怠惰、浪費を例にとってみよう。目の前の結果にのみ目を奪われ、後々に到来する結果について学ぼうとしない者は、悪い習慣を招きよせる傾向があるし、一定の確率でそうなる。

これが、人間が持つ、致命的に嘆かわしい習性だ。生まれた時は全くの無知であり、行動を直接の結果に基づいて決定してしまう。つまり、最初の段階では目に見える結果のみを扱ってしまうのだ。長い時間を経てようやく、他の結果を考慮することを覚えるのであるが、人間はそれを2つの全く異なる教え-経験と洞察力-から学ぶ必要がある。経験は効率よく教えてくれるが、同時に残酷でもある。ある行動の結果を、我々に自ら引き受けさせることで経験は教授してくれる。しかし、焼け死んでしまっただけは火が熱いことを学べないのだ。もし可能であるならば、私は代わりにより手加減してくれる教えを選びたい。洞察力のことだ。そういうわけで、私はある経済現象の影響を分析するために、目に見える結果と目に見えない結果を対比させながら、議論を進行していくつもりだ。

## I. 壊れた窓

ジェームズ・Bという善良な店主がいる。彼のそそっかしい息子がガラス窓を割った際に、彼が怒る様子を目にしたことがあるだろうか？その場に居合わせたならば確実に、全ての見物人が（たとえ30人いたとしても）明らかに満場一致でかわいそうな店主をなぐさめる光景を目にするだろう。彼らはこう言う。「怒っても誰も得をしないよ。みんな生活しなくてはいけないし、もしガラスが一枚も割れなかったら、ガラス職人はどうすればいいんだ？」

この手の慰めはある種の理論をまるごと体現しており、このような単純な例においてもその姿を現している。残念ながら、それは我々の経済組織を大きく制御する理論と全く同じものであることが、見てとれるだろう。

破損を直すのに6フランかかったとしよう。事故によりガラス職人が6フラン儲け、仕事の機会が6フラン分増えたのだ、とあなたは言う。私はそれに反論する言葉を持っていない：あなたは全く正しい。ガラス職人は到着し、仕事を行い、6フランを受け取り、手を払いながらも、心の中ではうっかり屋の子供に感謝するだろう。全て見ての通りだ。

しかしその一方で、残念ながらよくあるように、あなたがこのように結論付けたらどうだろう。ガラスを壊すのは良いことだ：なぜならお金が流通し、産業が活発化するからだ、と。私はこう口を出さずにいられない。「ちょっと待て！君の理論は目に見える結果のみにとらわれ、目に見えない結果を考慮していない。」

あなたには店番が6フラン使ったおかげで、他のことにそのお金を使えなくなったことが見えていないのだ。窓を直す必要がなければ、彼はたぶん、使い古した靴を買い替えたり、本棚に新しく本を追加できただろう。つまり、この事故がなければ、彼は他で6フランを使うはずだったのだ。

この事件により、産業全体がどう影響されるか見てみよう。窓が割れ、ガラス職人の仕事が6フラン分増えた。これが目に見える結果だ。もし窓が割れなければ、靴屋（あるいは他の職人）が6フラン分の仕事を得たであろう。これが目に見えない結果だ。

そしてもし目に見えない結果（好まれない事実）が目に見える結果（好まれる事実）と同等に考慮されていれば、産業全体も、仕事の機会の総量も、窓が割れたかどうかには影響されないことが理解できるはずだ。

ジェームズ・B自身について思いを巡らせてみよう。窓が割れる最初の設定では、彼は6フラン使い、以前と変わることなく窓を利用し続ける。

窓が割れない第二の設定では、彼は靴に6フラン使い、窓を利用しつつ、同時に新しい靴を享受していたはずだ。

ジェームズ・Bもまた社会を構成している以上、私たちはこのように結論せざるを得ない：全体を考慮して、労働と快樂の両面を評価した結果、社会は壊れた窓の分だけ価値を失ったのだ。

「社会は無駄に破壊された分だけ価値を失う。」このように、常識と異なる結論を得たならば、保守的な人間は髪の毛を逆立てるだろうが、私たちは以下の原則にたどり着くまで上り詰めなければいけない：「破壊し、損ない、無駄にすることは仕事の機会を増やすことにはならない。」あるいはもっと短く、「破壊は利益ではない」とも言える。

経済通たちよ、あなたたちはどう応えるのだ？ パリ火災が起こった結果、建て直す必要のある家屋の数から経済が受ける恩恵を精密に計算してみせた M. F. チャマンの良き信望者たちよ、あなたたちはどう応えるのだ？

申し訳ないが、彼らの主張がこちら側に侵入し続ける限り、私はその非の打ち所の無い計算に茶々を入れ続ける。しかし、私は彼にぜひ、目に見えない結果を考慮に入れ、目に見える結果と並べたうえで、計算をやり直してほしいと願っているのだ。読者は、私が提示した小話には二人でなく、三人の登場人物がいることに注意する必要がある。その中の一人であるジェームズ・Bは消費者を代表し、破壊により二つのうちの一つの楽しみを失う。第二の登場人物は生産者を代表するガラス職人であり、破壊の結果、仕事を得る。第三は破壊の分だけ仕事を失う靴屋（あるいは他の職人）だ。いつも影に隠れて、目に見えない結果を体現しているこの第三の登場人物こそが、問題に不可欠な要素なのだ。彼は、破壊活動に利益を見いだすのがどれだけ馬鹿げているか、私たちに教えてくれる。そして彼は後ほど、規制が利益を生むと考えることも同じくらい馬鹿げていると教えてくれる。結局、それは部分的な破壊でしかないからだ。それゆえ、引き合いに出された数々の主張の根本までたどり着けば、以下の粗野な論法を繰り返しているだけだと分かるはずだ。「もし誰も窓を割らなかつたら、ガラス職人はどうなるんだ？」

## II. 軍隊の解散

個人について言えることは、集団についても言える。いずれも、満足を得たい場合は、自然と損得を考えるものだ。国家にとっては、安全を確保していることが最大の利点になる。もし、安全を確保するために 10 万人の兵士が必要ならば、私は何も口を出すことはない。犠牲を払って、安心を得るとのことだからだ。私の立場を誤解しないでいただけたらどうか。ある議員が、納税者の出費を節約するために 10 万人の兵士を除隊させよう、と提案したとしよう。

もし私たちがこのように応えるのであれば、私は何も言うことはない。「10 万人の兵士とそれに費やされる大量の資金は国家の安全保障に不可欠である。それは犠牲であるが、その犠牲がなければフランスは分裂するか、外国に侵略されてしまう。」その考えが正しいか間違っているかはわからないが、理論的には経済に不利に働く要素は何もない。おかしくなるのは、犠牲は特定の人間に利益をもたらすのだから、利益の一種である、と捉えられた時からだ。

提案者が席に着くや否や、雄弁家が立ち上がって次のような演説をぶたないはずがない、と私は考えている。「10 万人を除隊させるだと？自分が何を言っているのかわかっているのか？彼らはどうすればいいのだ？どこへ行っても仕事が不足しているし、在庫が余っているではないか。兵士を解放して競争を激化させ、賃金の額を押し下げるのか？今や生活するだけでも厳しいのに、国が 10 万人もの人間に食い扶持を見つけなければならぬなんておめでたい話だ。それとは別に、軍隊はワイン、武器、制服を消費することで駐屯地の経済を潤していることを考慮したまえ。つまり、大量の業者に救いの手を差し伸べているのだ。いったい誰が、この巨大な産業活動を保古にするなどという考えを持たねばならないのだ。」

この論法は、明らかに 10 万人の兵士を養い続けることに賛成している。軍隊の活動は必要であり、経済的にも理にかなっているとしているからだ。私は経済面に絞って論破しよう。

10 万人の人間が納税者に 100 万フランの負担を強いながら生活し、同時に多くの業者に同じ額の利益をもたらしている。これが目に見える結果だ。

しかし、納税者の懐から出された 100 万フランは、その分だけ納税者と業者の生活を支えることをやめてしまうのだ。これが目に見えない結果だ。ここで一旦、計算してみたまえ。その結果を見たらうえて、大衆にどんな利益がもたらされるのか、あなたは私に言えるのか？

どこに損失が生じるのか、私が答えよう。図式を単純にするために、10 万人と 100 万フランではなく、一人と千フランに置き換えてみる。

私たちは A という名の村にいたとしよう。徴兵担当の曹長が村を回り、一人の男性を招集する。続いて徴税員が千フラン分の税金を控除する。男性と千フランはメス(訳者注:フランスの地名)に送られ、後者は男性が一年間何もしない間の生活費となる。もしメスのみを考慮するなら、あなたは正しい:かの地では多くの利益が得られる。しかし、もし A 村に思いをやれば、異なる判断を下すはずだ。盲目でない限り、村は一人の働き手と、労働により彼が得る千フラン、それに千フランが消費されることで得られる経済活動を失ったことが見えるだろう。

一見、何がしかの補償が効いているようだ。村で起こっていたことがメスに移る、それだけのように見える。しかし、損失をこのように計算してみよう。村では、その男は労働者であり、畑を耕し、働いていた。メスでは、彼は兵士であり、(号令にあわせて)右を向き、左を向いている。金額と、お金が流通するところは同じだが、一方では毎年 300 日も生産的な労働が行われ、他方では、軍隊の全てが安全保障に不可欠な活動をするわけではない、との前提の元で 300 日も非生産的な労働が行われている。

軍隊の解散が起こったとしよう。10 万もの余剰な労働者が生まれ、競争が激化し、賃金が下がるとあなたは私に言うだろう。それがあなたの見る結果だ。

しかし、ここであなたには見えない結果を述べよう。あなたには 10 万人の兵隊が除隊することはお金を無駄にすることではなく、納税者に返すことだということが見えない。あなたには、10 万人の労働者を市場に投入するということは、同時に彼らの労働に報いるための 100 万フランを投入することも意味するということが見えない。供給を増やすことは、需要を増やすことでもあるのだ。つまり、あなたの唱える賃金の低下は根拠がないのだ。あなたには、軍隊を解散する前も、した後も、国には 10 万人の労働力と 100 万フランが存在していることが見えない。違いは全て、以下の点に集約される。解散前、国は 10 万人に 100 万フランを与え、何もさせずにいた。解散後、同じ金額が彼らの労働に支払われるのだ。つまり、納税者が自分のお金を兵士に与えて何もさせずにいても、労働者に与えて何かをさせても、お金が流通した後は結果的に同じだということが、あなたには見えていないのだ。ただ一点、後者では納税者は見返りを受け取ることができるが、前者では何も受け取ることがない。結果的に、国家は丸々損をするのだ。

私がここで反論している詭弁は、原理原則の試金石である時代の流れに耐えることはできないだろう。もし全ての代償を払い、全ての人間を満足させた結果、軍隊を増強することで国家が利益を得るのであれば、その建前の元で全ての男性人口を徴兵すれば済むということにならないか？

### Ⅲ. 税金

次のような意見を耳にしたことはおありだろうか。「税金より効率のいい投資はない。税金によってどれだけの家庭が養われ、産業に影響を与えるか、見ればすぐにわかる。尽きることのない流れであり、生命そのものなのだ。」

この信条に対抗するためには、私が先に述べた反論に言及する必要があるだろう。政治経済に携わる者たちは、自らが提唱する内容があまり心地良いものではないゆえ、繰り返し啓蒙が必要なることを知り抜いている。それゆえ、彼らは格言を自らの目的に沿うよう悪用し、繰り返し吹聴することで、皆を教育できると信じている。

政府が推奨する利点は、目に見える範囲のものだ。稼ぎ手が得る利益もまた、目に見えるものだ。これが皆の目を曇らせることになる。

しかし、納税者がつけを払う必要のある損失は、目に見えない。稼ぎ手が被る被害もまた、自明であるにもかかわらず、目に見えないのだ。

ある政府の役人が個人の名目で 100 スー（5 フラン）を使用することは、ある納税者の使用額が 100 スー減ることを意味する。しかし役人の支出は実行に移されるので目に見えるが、納税者の損失は、もちろん、実行に移すことが許されないので、目に見えない。

あなたは、例えば国家を乾いた土地に、税金を肥沃な雨にたとえるかもしれない。それはそれでいい。しかし、雨がいったいどこから来るのかをあなたは自問するべきだ。税金それ自身が、土地から湿気を奪い干上がらせた張本人ではないのか？

つまり、土地は蒸発により失われるのと同じ量の貴重な水分を、雨によって受け取っているだけなのではないか、と考える必要があるのだ。

一つ確かなことがある。ジェームズ・B が 100 スーを税金として支払っても、彼は代わりに何も受け取ることはないということだ。後に、ある役人がその 100 スーを使うことでジェームズ・B に還元したとしても、それは同等の食料や労働の代価としてなのだ。結果的に、ジェームズ・B は 5 フラン（100 スー）を失っているのだ。

確かに、役人がジェームズ・B に対して同等の職務を果たすことはしばしば、いや多分かなり多くの割合で、ありうる。この場合、どちらの側にも損失は発生せず、単なる交換が行われたただけだ。それゆえ、私の論考は有能な役人には全く適用されない。私が言いたいのはこれだけだ：もし役所を建てたいのなら、どれだけ役に立つのかを証明してもらいたい。ジェームズ・B に対して、彼が支払った金額と同等の職務を提供してその価値を提示してみるがいい。そして、この本質的な有用さ以外は、役人、

彼の家族、彼の扶養者が受ける利益を議論に持ち込んではいならない。それにより皆の仕事の機会が増える、と主張してはいならないのだ。

ジェームズ・B が政府の役人に対して、本当に役に立つ職務の見返りに 100 ペンスを払う行為は、彼が靴屋で一足の靴に 100 スー払う行為と全く同じなのだ。

しかしジェームズ・B が政府の役人に 100 スー払い、結果として迷惑を被る以外に何も得るものがなかった場合、泥棒に金を渡したのと同じことになる。その場合、政府の役人が 100 スーを国の労働者の利益に使う、と主張するのは荒唐無稽になる。泥棒ですら同じ行為をしていることになるからだ。道端で法の名を語る寄生虫やたかり屋に捕まっていなければ、ジェームズ・B だって同じことをしただろう。

目に見える事象にのみ基づいて物事を判断するのを避け、目に見えない事象に基づいて判断するよう自らを習慣付けようではないか。

昨年、私は財務委員会に席を連ねていた。選挙制度のおかげで、委員会から反対政党の者が全て排除される事態にはなっていなかった。選挙民は賢い選択をしたわけだ。私たちは M.ティエールがこのように発言するのを聞いた。「私は生涯を、君主制や教会による指導を支持する政党と闘うことに費やしてきた。しかし、共通の危機を前にして私たちが団結した結果、今や私は彼らと協同し、彼らを知り、直接対話を行うようになっている。彼らが、かつて想像していたような怪物ではないことを、私は知った。」

互いに交わることのない政党間では、不信感が増幅され、憎しみが醸成される。もし与党が野党を招いて委員会と一緒に出席すれば、両者の考えにそれほど相違がないことが明らかになるだろうし、それ以上に相手の意図に考えられていたほどの悪意がないことがわかるだろう。しかしながら、昨年私が財務委員会に在籍していた際のことだ。共和国の大統領、大臣、大使の経費をささやかであるが節約しよう、と私の同僚が発言するたびに、次の反応が返ってきたのだ。

「職務の質を上げるためにも、職場を豪華にし、威厳を持たせることは必要だ。そうすればよりよい人材をひきつける事ができる。数多くの不幸な人間が大統領との面会を希望している。常に彼らを拒絶しなければいけない立場に大統領を置くということは、彼に苦痛を強いるということなのだ。閣僚が執務を行う場所に格式を求めるのは、憲法に基づいて機能する政府の不可欠な要素であるのだ。」

これらの論考に反論することは可能だが、それ以前に、それらは注意深く分析するに値する。正しいかどうかはともかく、それらは民意に基づいているとされている。単なる節約や嫉妬に動かされている多くのカトー（訳者注：古代ローマの政治家）達に比べれば、私はそれらの考えに対してより多くの敬意を払っている。

しかし、次のような封建時代の遺物が提示されると、私の意識で経済を司る箇所が鋭く反応し、祖国の聡明さ(の欠如)に恥ずかしさを覚える。以下の考えは常に出没し、かつ好ましく受け取られているのだ。

「それに、役人を多く抱えることで、芸術、産業、労働が促進される。国家元首とその閣僚は、社会全体の血流をうまく回しているからこそ、宴会や夜会を開催できるのだ。彼らの所得を減らすことは、パリの産業の息の根を止め、やがては国全体にも同じ効果を及ぼすだろう。」

紳士諸君、頼むからせめて算数くらいはできないだろうか。足し算を列の上から下に向かって行かうか、下から上に向かって行かうかで、結果が異なるなどということは、フランスの国会で述べることは差し控えていただきたい：全く恥ずかしい話だが、同意が得られるかもしれないから。

例えば、100 スーを工事人に払って私の畑に堀を作ってもらおうとしよう。ちょうど商談がまとまったときに、徴税人がやってきて私の 100 スーを取り上げ、内務大臣に送る。私の商談は終わりだが、大臣は宴会にもう一品料理を追加できるわけだ。いったいどんな根拠に基づいて、この経費が国の産業を促進するなど断言できるのだ？単に、労働とその果実の関係を逆転させただけだと、なぜ見えないのだ？大臣の宴会を華やかにできるのは確かだが、ある農民の畑が灌漑されないままであるのもまた、事実なのだ。確かに、パリの酒場主が 100 スー儲けたであろう。だが、5 フラン(100 スー) 儲ける機会を失った工事人がいることもまた確かなのだ。結局、こういうことだ。役人と酒場主が満足する、というのは目に見える結果で、畑が灌漑されずに工事人が仕事を得られない、というのは目に見えない結果なのだ。いったいどうやったら、2 足す 2 が 4 になることを証明することがそんなに難しくなるのか、教えてほしい。たとえあなたがそれを証明しても、「あまりにも自明のことで、退屈だ」と言われ、何も証明されなかったかのように彼らは採決を行うのだろうか。

#### IV. 舞台劇と芸術

国家は芸術を支援するべきだろうか？

この質問に関して、どちらの側に立っても多くを語れる。芸術は国家の魂を育て、高め、調和させると、票を稼ぐために主張することは可能だ。物の所有に惑わされることを防ぎ、美しいものを愛でることを推奨し、礼儀作法、習慣、道徳、さらには経済産業までも、良い効果をもたらすと。イタリアの劇場と音楽学校がなくなれば、フランスの音楽はどうになってしまうのか？国立劇団がなくなれば、舞台芸術はどうなる？美術館、所蔵品、画廊がなくなれば、絵画と彫刻は？さらには、中央政府とそれともなう芸術の支援がなくなれば、フランスの労働者が気高く誇る洗練された気品と、世界へ送り出す製品の数々は？それらの結果が実際に起こると考えてみよう。ヨーロ



ッパに対してフランスの優位さと栄光を見せつけることができなくなるとすれば、全ての市民にささやかな出資をしてもらうことを放棄するのは、軽率な行為ではないのか？

上記や他の数多くの主張が強力であることを私は否定しない。論破するには、同じ程度に強力な主張を行う必要があるだろう。まず、司法の権限を拡大することの是非がある。議員達は、芸術家の利益を増やすために熟練工の賃金を決定する権限すら握るべきなのだろうか？M.ラマルチー又はこう言った：「劇場への支援を取りやめるだけで済むのか？大学や、美術館や、学会や、図書館の支援をも取りやめることに繋がらないと言えるのか？」それに対しては、こう答えることが可能だろう。もし好ましくて有用なものを全て支援したいと望むのなら、どこまでやれば済むのだ？農業や産業、商業、慈善活動、教育のために王室用の予算を組まなければならないのではないのか？その場合、政府が芸術の振興を優先すると言い切れるのか？

この問題は決して決着がついたとは言えないが、現在繁盛している劇場は、自らの資産を頼りにしていることは明白だろう。さらに、より高い次元から観察すると、願望と欲望は民衆が公共の富に満足しているその度合いに応じて、洗練された地方から発生していることが見えるはずだ。願望と欲望はお互いを成長させていることもわかるだろう。政府はこの問題に手を出すべきではない。なぜなら、現在では幸いなことに、贅沢品の需要を考慮せずに、徴税を通じて購買意欲を喚起することはできないからだ。それは結局、文明の自然な発展を阻害することになる。私の観察によれば、願望、好み、仕事、人々などを人工的に移動させると、大衆はしっかりした基盤を失い、不安定で危険な状態に置かれることになる。

以上、市民がいかに欲望と希望を満足させるか、そしてそのためにどのような行動を取るか、国家が介入することに反対する論者の主張をいくつか紹介した。告白すると、私もまた、選択や動機は上にいる政府が与えるのではなく、下にいる市民から湧き上がるべきだと考えている一人だ。その反対の信条は、私の目には人の自由と尊厳を破壊するものとして映る。

私たち経済学者たちが、不当で間違った結論に導かれた人々から、どのような非難を浴びているかご存知だろうか。私たちが政府の介入に反対すると、あたかも介入の対象者を拒否しているかのようにとられてしまうのだ。私たちはあらゆる活動を観察したいと考えているゆえに、あらゆる活動に敵対しているように見られてしまう。私たちがそうするのは、観察は自由だし、観察すること自体に喜びを見出しているからだ。それゆえ、もし私たちが政府は宗教活動に課税するべきではないと言え、無神論者だと言われる。政府は教育に課税するべきではないと言え、学識に反対していると思なされる。政府は課税によってある土地や産業分野の値段をつりあげるべきではないと言え、財産所有や労働の敵だ、と言われる。政府は芸術家を支援するべきではないと言え、芸術を無駄と見なす野蛮人だと言われる。

そのような決め付けに対して、私は持てる力の全てを使って反論する。国家は一部の  
人々をえり好みすることなく、あらゆる活動の自由な発展を保護するべきだ、と私た  
ちが主張する時、宗教、教育、財産、労働、それに芸術と決別するなどという馬鹿げ  
た考えを楽しんでいるところか、全くその逆だ。つまり、このように言いたいのだ：  
自由が保証されれば、社会に住む全ての人々は、お互いに調和をはかりつつ自らを成  
長させるだろう。自由が保証された状態では、現在のように困難、不正、暴政、混乱  
を起こすことは誰一人としてないだろう。

私たちの敵は、国家による管理や支援がなければどんな活動も死滅するだろう、と考  
えている。私たちの考えはその逆だ。彼らは人間ではなく、法律を信じている。私た  
ちは法律ではなく、人間を信じているのだ。

M.ラマルチー又はこう言った。「この原則に基づき、私たちは博覧会の開催を撤廃す  
る必要がある。国の誇りと富を消費するからだ。」だが私は彼にこう言いたい。「君  
の考え方によると、支援しないことは放棄することと同じだ。国家の意思抜きでは何  
も自身を支えることはできないという原則に従い、君は政府が生かさない限りは何も  
生きていけない、と結論付けている。しかし私は君が選んだ例えそのものを使って、  
君の考えに反論してみせる。最も自由で普遍的な一上げさでなく、人間らしい、とすら  
言おう—精神に育まれた、最も大規模で高尚な博覧会が、現在ロンドンで開催されて  
いる。政府が何の役割も果たしていないたった一つの博覧会であるし、税金は一切使  
われていない。」

芸術の話に戻ると、繰り返すが、政府の支援に賛成あるいは反対するどちらの理由に  
も強力な根拠がある。ただ読者には理解していただきたいが、この論文の目的はそれ  
らの理由を解説したり、賛成や反対を唱えることではない。

M.ラマルチー又は次の主張を行ったが、それは私が扱っている経済の研究に関わるこ  
となので、黙って看過することはできない。「劇場にとっての経済問題は一言で表現  
できる。仕事の機会だ。仕事の内容が何であるかはほとんど重要ではない。国のほか  
の労働作業と同じように生産的であるか、非生産的であるはずだ。フランスの劇場は、  
君も知っているように、8万人を下らない数の労働者を養っている。画家、石工、装  
飾工、衣装係、建築家などだ。彼らは首都のいくつかの地域において、住民の生活や  
活動そのものを司っているのだ。それゆえ、あなたたちの思いやりを得る資格があ  
る。」思いやりだと！あなたたちのお金だと言ったらどうなのだ。

さらに彼はこう続ける。「パリで得られる快樂は地方の仕事と消費につながり、金持  
ちが贅沢をすることであらゆる労働者を20万人養うことになる。彼らは共和国に存  
在する多様な劇場関連の産業に従事しており、フランスに彩りを与える高尚な快樂か  
ら生活の糧と家族や子供の必需品を得ているのだ。あなたたちが差し出す6万フラン  
は、彼らのために使われるのだ。」（素晴らしい。誠に素晴らしい。皆さん、盛大な

拍手を。) 私からは、こう言わざるを得ない。「最低だ！最低だ！」もちろん、彼の意見を、私たちが論考している経済の問題に当てはめた上での話だ。

確かに、6万フランのうちいくばくかは、こうした劇場の労働者に行き渡るだろう。途中で多少は賄賂に変わるかもしれない。もし事態をもう少し細かく見てみると、大部分はどこかに消え、運のいい労働者が残り物を漁っている様子が見えるかもしれない。しかし、議論を続けるために、全ての金額が画家や装飾工に行き渡るとしよう。

ここまでは目に見える。しかし、そのお金はどこから来るのだ？これが設問の裏側であり、表側と同じくらい重要だ。この6万フランはどこから湧いてきたのだ？そして、議員の投票を受け、リポリ街からグレニエーユ街へ輸送されることがなければ、いったいそのお金はどこで使われるはずだったのだ？これは目に見えない。確かなことは、投票の結果、この金額が投票箱で生み出されたなどと信じる人間はいないということだ。国家財政にその金額が足された、と信じる人間もいない。この奇跡のような投票がなければ、6万フランは永遠に姿を見せたり、感触を確かめることができずに終わったと信じる人間もいない。ほとんどの場合に可能なことは、お金のある場所から取り、別の場所へ渡すことだけだ、と私たちは認めなければならない。もしお金がある目的に使われるのであれば、それは別の目的地から進路を変えられたからであるに過ぎない。

この例で明確なのは、1フラン分貢献した納税者が、この金額を自分では使えなくなることだ。彼は、1フランから得られる満足を剥奪される。彼からその金額を受け取るはずだった人間も、どんな職業に従事しているのであれ、その金額分の利益を失う。6万フランを可決することで、国家の財政や労働に何がしかの増加が見込めるなどという子供じみた幻想はやめようではないか。喜びと報酬が得られる場所が変わる—それだけのことだ。

ある種の報酬や労働は、より切実で、高尚で、理にかなった報酬や労働と同等なのであろうか？私はこの考えに反論したい。6万フランを納税者から奪うことにより、労働者、配管工、大工、鍛冶屋の賃金が減らされ、入れ替わりに歌手の報酬が増やされることになるのだ。

後者が前者より同情をより多く買うという証拠は見当たらない。M.ラマルチー又もそうは言っていないはずだ。彼自身も、劇場の労働は他の労働と同程度に（それ以上でもなく）豊かで生産的であるとしている。これは疑わしい。私が後者は前者ほど豊ではないと言う最大の根拠は、後者は他の人間からの支援を必要とするからだ。

しかし、異なる種類の労働について、本質的な価値を比較することは、目下の私の目的ではない。私は以下の点を提示したいだけだ。もしM.ラマルチー又と彼の主張の賛同者が、喜劇役者の扶養家族が得る賃金に注目しているのならば、彼らは納税者の扶養家族が失った賃金にも注目しなければならない。彼らは自らの願望のゆえに、富

の移動を増加と取り違え、自らを道化にしてしまったのだ。もし彼らが自らの信条に忠実であるならば、政府の支援をとどまることなく要求するだろう。1フランも、6万フランも、億単位のフランも、同じように扱われるだろう。

税金が議論の対象になっている場合は、紳士諸君、この本質に遡って税金の有効性を証明する必要がある、このような不幸な仮定に頼るべきではない。「公共出費は労働者階級の助けになる」この仮定は、公共出費が常に個人出費に優先し、それゆえ食いつけ扶持を分け与える労働者が入れ替わるだけで労働者階級全体の取り分は何も増加しない、という重要な真実をごまかしている。あなた方の主張はたいそう見栄えが良いが、およそ根拠のようなものに支えられていると言うには荒唐無稽すぎる。

## V. 公共事業

ある国家が、事業を興すことで社会に利益をもたらすと考え、一般大衆の合意を得た後に実行に移すことは何ら不自然でない。しかし告白しよう：そのような計画を推進するため、次のような経済音痴な発言がなされると、私は忍耐力を失う。「しかも、庶民に仕事を提供する手段になる。」

国家は道を切り開き、宮殿を建て、街路を整備し、運河を通すことで一部の労働者に仕事を提供する—これが目に見える結果だ。しかしそれは他の労働者の仕事を奪うことになる—これが目に見えない結果だ。

道路工事が始まった。千人の労働者が毎朝現われ、毎夕帰宅に着き、賃金を受け取る—これは確かなことだ。もし道路が整備されず、物資が承認されなければ、これらの優秀な人材は仕事を得ることもなければ、賃金を受け取ることもない—これもまた確かなことだ。

しかしそれが全てなのか？計画は、全体を見渡した場合、何か別の要素を孕んでいないのだろうか？M.デュパンが「国会は議決を採択した」と高らかに宣言する瞬間に、月から明かりに照らされて大金がMM.フルドやビニョーにある国家の金庫に降りてくるとでも言うのか？よく言われるように、人類が正しく進化を遂げるためには、国家は収入に加えて出費も管理する必要があるのではないか？徴税人と納税者を働かせ、前者には徴収を、後者には支払いをさせる必要はないのか？さて、問題を両方の面から考えてみたまえ。国家が政策に賛成票を投じた者たちに対して使うお金を論じるならば、今や不可能になってしまったが、納税者がたぶん選択したであろう使い道について論じることを忘れてはならない。公益事業はコインの両面であることが理解できるだろう。一方には仕事に従事する労働者が刻まれ、これは目に見えるものだ。もう一方には仕事にあぶれた労働者が刻まれ、これは目に見えないものだ。

この論文が論破しようとしている詭弁は、公益事業に適用された場合に危険性を増す。最高に無駄遣いの多い企業や浪費を正当化してしまうからだ。もし鉄道や橋が既に有

用であるならば、それを述べるだけで済む。しかしそれがまだ存在しない場合、彼らがどうするか？このような神秘的な主張が行使される。「労働者に仕事を見つけなければいけないからだ。」

すなわち、シャン・ド・マルスの堀を作り、また埋め立てる命令が下されることになる。偉大なナポレオンは、掘ってはまた埋める作業をさせることで、慈善事業を行っていると考えていたようだ。それゆえ彼はこう言った。「結果的に大切なのは何だ？労働者階級に富が広く行き渡るのを見たい、それだけなのだ。」

問題の核に迫ってみよう。お金が関わることで、私たちはだまされているのだ。市民に金銭面で公共事業に協力してもらうということは、実際には自らの労働で得た、課税の対象になる成果の差し出しに同意してもらうことを意味する。さて、もし全ての市民が集められ、全体にとって有用な仕事を一齐にさせられるとしたら、これは簡単に理解できる。彼らは労働の結果自体を見て報われるからだ。

しかし、彼らを集めた挙句、仕事を与える名目で誰も通らない道路や誰も住まない屋敷を作らせるのは馬鹿げており、彼らにはこのように反論する権利がある。「この仕事には関わりたくない。私たちは自分の思い通りに働きたい。」

市民に、金銭ではなく労働力の面で協力してもらうことは、いかなる意味においても、最終的な結果を左右したりはしない。ただ一つ注意が必要なのは、損失は全員に影響を与えるという点だ。金銭面の協力であれば、公務員は他の市民が既に被った損失にかぶせることで、自らの損失を免れることができる。

憲法にこのような条文がある：「仕事を探している者を雇うために国や地方政府、教会が公益事業を行うことで、社会中に労働が促進され、よい効果をもたらす。」

しかし、一般的な長期的で規則に則った手法としては、それは実行不可能で破滅的な幻想でしかない。ほんの少しの目に見える仕事の増加と引き換えに、大量の目に見えない仕事の損失が生まれるからだ。

## VI. 仲介者

社会は人間がお互いのため、強制または自発的に職務を遂行することで成り立っている。つまり、公共事業と、個人事業のことだ。

前者は法律で強制され規制されており、簡単に変更できるとは限らない。望ましい結果を残している場合ですら、有効であるかどうかとは無関係に生き延びる。奉仕活動というより公共の迷惑と化した後にも、公共事業の名を冠することができる。後者は個人の責任と意思の範疇に属する。全ての者が、議論を尽くした後に、望むものや持

てるものをやり取りする。価格にちょうど比例して、有用なものが得られるという前提が常にある。

これこそが、前者による職務がしばしば硬直化し、後者による職務が法則どおり発展を続ける理由である。

内在する強みを無駄遣いしながら公共事業を肥大化させると、社会全体に媚びへつらいがはびこる。現代にはびこる派閥のいくつかは自由な個人事業にすらそうした文化をあてはめ、職業を単なる機能に貶めようとしている。

これらの派閥は彼らが仲介人と呼ぶ存在を頑なに拒否する。彼らは資本家、銀行家、投機家、予想家、商人、交易人を、生産と消費の間に干渉して両者から利益を得ながら何も見返りを渡さない存在だと見なし、積極的に抑圧している。あるいは、仲介人が果たす仕事を政府に移管しようとする。仕事そのものは抑圧しようがないからだ。

社会主義者達はこの問題において詭弁を使用している。大衆に対して、仲介人に支払う代償を見せつけながら、国家に支払わなければならない代償は隠しているからだ。ここではいつもの、目の前にあるものと、想像の中でしか存在しないもの、あるいは目に見えるものと、見えないものとの対立が起こっている。

物資が不足していた 1847 年に、社会主義者は彼らの破綻した論理を作り上げ、広めることに成功した。彼らは、困窮している人々はどんな馬鹿げた考えも受け入れることをよく知っている：「空腹は判断力を狂わせる。」

それゆえに、「人身売買、貧困へのつけこみ、独占」といったきらびやかな言葉の力を借りて、彼らは商業を妨害し始め、その有益性を覆い隠そうとした。

彼らは言う。「アメリカやクリミア半島からの食料輸入を商人に任せて、いったいよいことがあるのか？なぜ国や省庁、地方政府が食糧配給を手がけ、貯蔵用の倉庫を手配しないのだ？それを有償で販売すれば、哀れな大衆は自由な交易、すなわち傲慢で、自己中心的で、無政府状態な交易に貢ぐ必要がなくなる。」

人々が交易に貢ぐお金は、目に見える。人々が社会主義の元で国やその代理人に貢ぐお金は、目に見えない。

人々が交易に対して払う、貢ぎ物とされたものは何で成り立っているのか？競争が激しく、価格が下がった状態で、二人の人間が自由に、お互いに対して職務を遂行することで成り立っているのだ。

パリにお腹を空かせた人間がおり、オデッサに空腹を満たせるとうもろこしが存在するとき、とうもろこしが胃袋に収まるまで、空腹の苦しみが止むことはない。その状態に至るまでには、三つの方法がある。第一：飢えた人間が自ら出向いて、とうもろ

こしを手にする。第二：交易を行う人間にとうもろこしを調達させる。第三：飢えた者がお金を出し合い、担当の役所を通じて役人に渡す。この三つの方法のうち、どれが一番有効なのだろう？いつでも、どの国においても、そしてより自由で、聡明で、経験を積んでいればいるほど、彼らは第二の手法を選択するだろう。私が思うに、この選択が正しいことを証明するには、以上で十分だ。私には、全体として人類がこれほど身近な問題について己を誤魔化しているとは思えない。しかし、それでも一度このことについて考えてみよう。

36万人もの市民がオデッサへ出向いてとうもろこしを入手するのは明らかに不可能だ。それゆえ、第一の手法は無駄に終わる。消費者は自ら動くことはできない。彼らは、仲介人、役人、あるいは代理人に頼らざるを得ない。

しかし、第一の手法こそが、最も自然な方法だということにあなたは気づいたのだろうか。実際、飢えた人間はとうもろこしを得なければならないのだ。その作業は彼自身が関与し、彼が自分のために行うべき職務なのだ。もし他の人間が、いかなる理由であれ、彼のためにこの職務を遂行するなら、その人間は彼に代償を要求することになる。私が言いたいのはつまり、仲介人は報酬の原則を守りながら存在している、ということだ。

それはともかく、社会主義者が寄生虫と呼ぶ存在について言及しなければならない。私の質問はこうだ：商人と役人、どちらがより明白な寄生虫なのだろうか？

商業（もちろん自由な商業を指す：さもなければ私の検討に値しない）は、自らの利害に基づいて、季節を推し量り、作物の状態について毎日状態を報告し、世界のあらゆる場所についての情報を得、需要を予測し、前もって準備を行っている。移動手段を常に確保し、担当者を各地に配置している。そして、行程の全てにおいて節約を重ね、最小の努力で最大の結果を得られるよう、最低金額で購入を行う。フランスが必要としている時にのみ物資を供給することに、フランスの商人はとらわれていない。彼らが最小の経費で成果を達成することに嫌でも関心を払うならば、消費者もまた否応無く経費削減の成果を得ようとする。とうもろこしが届いた後、商人にとってはリスクを避けるために、また回転率を上げるために、なるべく早く売りさばくことが利益につながる。

値段の比較という原則に則って、商業により、食料は常に、需要が最も大きく、価格が最も高い場所から始まって国の全てに行き渡る。必要とする人々に対してこれ以上完璧に届けられる組織活動は想像すらつかない。社会主義者達には見えないが、この組織の美しさは、それが自由だという事実から発される。消費者は輸送、保管、手数料などの経費に対して代価を払う必要があるのは事実だ。しかし、食料を消費する者が、彼の手に届く距離まで食料を運ぶ費用を負担せずに済むやり方など、生み出せるのだろうか？職務に対する報酬も支払わなければならないだろうが、競争によりこの分の価格は最小限に抑えることができるはずだ。公平さについていえば、マルセイユ

の商人がパリの職人のために働くとき、パリの職人がマルセイユの商人のためには働かない、ということはほぼありえないだろう。

社会主義者の発明によると、国は商業の手助けを行うべきだとなる。何が起こるだろう？蓄えがどこにあるか、大衆に知らせて欲しいと考えるべきだろうか？価格についても国家が介入すべきなのか？4万人の教区代表が、需要が発生した日にオデッサに一度に押し寄せると考えてみたまえ。それは価格にどう影響を与えるだろう。これまでの蓄えも経費に数えられるのだろうか？輸送手段、船員、航海費、帆船はより少なくなると言うのだろうか？あるいは、あなたはこれらの経費を払う必要はないと言うのか？商人はそれで儲けが出るのか？あなたの教区の代表はオデッサへ出向いて、何も得られなくてもよいのか？彼らは博愛の原則に基づいて出張し、仕事をするのか？彼らは生活しなくてもよいのか？労働時間に応じて報酬を与えられなくてもよいのか？そして、これらの経費の合計は商人がいつも利用している2-3%の手数料の何千倍にも膨れ上がらない、とあなたは信じられるか？

それだけの税金を課税したり、食料を分配したりする困難さを考えてみるといい。そのような規模の団体につきものの不正や乱用について思いを巡らせるといい。政府にのしかかる責任を感じてみるといい。

これらの愚行を考え出し、困難な時代に大衆の間でそれを広めた社会主義者達は自らを文字通り進化した存在だと呼んでいる。そのような言葉を習慣的に乱用することで、言葉と、そこに渦巻く情念も一緒に定義づけられてしまう。それは危険なことなのだ。進化だと？彼ら紳士達は、自分らは一般人よりも遠くを見渡しており、唯一の欠点は時代を先取りしすぎていることだと主張する。自由な交易を抑圧するには時期尚早であるならば、偽装した寄生虫である彼らは、それは社会主義の背後に潜む大衆の責任だとする。私の魂と意志にかけて言うが、真実は逆だ。この問題における社会主義者の知識の浅はかさを理解できれば、野蛮な時代に逆戻りすることはなくなると私は知っている。現代の派閥族は実際の社会に存在する共同体を頑固に拒否し続ける。彼らは、自由な調整に基づいた社会こそが本来の共同体であり、彼らの豊かな想像力から生まれるものよりはるかに優れているという事実を無視しているのだ。

具体例を出して解説しよう。ある人間が起床して上着をはおる前に、以下のことが行われなければいけない。土地を囲い、掘り起こし、灌漑し、耕し、特定の植物の種を撒く。家畜を養い、羊毛を育てる。羊毛を紡ぎ、織り、染め、生地加工する。生地を切り取り、縫い、衣服に仕立てる。これらの工程の裏には、他の作業が控えている。つまり、土地を耕すための道具、羊の檻、倉庫、石炭、機械、馬車などをそろえなければいけないのだ。

社会が現実存在する共同体でないのであれば、上着が必要な人間はたった一人でそれを工面する必要があるだろう。つるはしを振るうところから最後の縫製まで、数多くの工程を自分で行うということだ。しかし、私たち人類を際立たせる特徴である社



会性のおかげで、それらの工程は多くの労働者の間で分割されている。消費が活発化するにつれて、ある工程が別の目的にも利用できるようになるよう、工程はさらに細かく分割されていき、それは公共の利益につながる。

利益の分配は、お互いが全体の中で負担した分に基づいて行われる。これが共同体でないのであれば、何であるのか教えてほしいものだ。

これらの労働者のうち、無から形のあるものを生み出した者は一人もいないことに注目してほしい。彼らはお互いに職務を行うよう義務付けられ、助け合って共通の目的に到達している。全体を見渡すならば、お互い同士、助け合いながら目的を達するということは、仲介者の役割を果たしているということなのだ。もし途中で、運送行程が、紡ぎや製織工程と同じく、専用に人員を割り当てるほど重要になってきたら、運送は他の行程に比べて依存度が高いなどと言えるのだろうか？運送は必要不可欠ではないのか？その工程に従事する者は、己の時間と労力を費やしてはいないのだろうか？そして、自身の労働により、同僚の手間を節約してはいないのか？この点において、彼と同僚の間に差はあるだろうか？私たちのためにものごとをまとめるふりをする社会主義者達の出る幕はあるのだろうか？私たちの自発的な共同作業を独裁的に破壊し、労働の分配を監督し、各自の努力を集団の努力に置き換え、文明を後退させる彼らに？私がここで述べる共同体は、誰もが自由に加入したり離れたりでき、居場所を選べ、自己責任において判断して交渉を行い、個人的な利益の源泉と保証を持ち込んでいる。それがゆえに、共同体らしさを欠くというのか？共同体という名を冠し続けるためには、偽物の革命家がやってきて彼の計画と意思を強制し、かつてのように己を人類の代表とみなす必要があるのか？

こうした高等な思想を解析すればするほど、根は同じだと確信することになる：自らの間違いを認めない無知と、完全無欠の名の下に宣言される独裁だ。

この余談を大目に見てほしい。国家社会主義者、ファランステール主義者、そして向こう見ずな人間による熱弁が媒体や新聞を賑わせ、仕事や商業の自由を深刻に脅かしている今、無駄にはならないはずだ。

## VII. 規則

ミスター・禁止（彼にこの呼び名をつけたのは私ではなく、M.シャルル・デュパンだ）は時間と資金をかけて、自分の土地で見つかった鉄鉱石を鉄に変えようとしてきた。ベルギーがより自然条件に恵まれていたため、フランスにはミスター・禁止よりも安価な鉄が出回るようになった。つまり、フランス人全員が、あるいはフランスが、誠実なフランドル人から購入することで、同じ量の鉄をより少ない労力で手に入れることができたわけだ。ゆえに、自己の利害を第一に考えて彼らは例外なくその手段を取り、毎日のように数多くの釘屋、鍛冶屋、車大工、機械工、蹄鉄工、その他労働者が、

自分自身か代理人をベルギーに派遣し、欲しいものを得るようになった。これはミスター・禁止を非常に不愉快な気分させた。

当初、彼は自己努力によりこの不正を止めようとした。困っているのは彼だけだったので、彼ができるのはそれだけだった。「私はカービン銃を持つ。」彼は言った。「ベルトにピストルを4丁挟みこむ。弾薬箱を満杯にするし、剣を構え、前線へ向かうだろう。最初に出会う鍛冶屋、釘師、車大工、機械工、鍵屋がもし私と取引をせずに自分で処理したい場合は、生活することの大切さを教えるために、彼らを殺すだろう。」出発する時になって、ミスター・禁止氏はいくらか内省し、戦場に行くかのような興奮をいくぶん静めた。「まず、鉄を購入した私の同胞や敵国の人間から反感を買い、私が彼らを殺す代わりに私が彼らに殺されることがないとはいえない。それに、私が使用人を全て招集しても、私の砦を死守することはできない。つまり、私の計画は、得られるはず成果よりもかなり高くつくことになるだろう。」

ミスター・禁止氏は、世界と同程度にしか自由でない自らの悲しい運命を迎えようとするところであったが、脳内で一筋の光明が走った。パリには巨大な立法府があることを思い出したのだ。「法律とはなんだ？」彼は自問した。「一旦制定されれば、善悪に関係なく、全ての人間が従わなければいけないきまりだ。それならば、私は偉大なパリの立法府の力を借りて、「ベルギー製の鉄は使用禁止」とする小さな法律を通せばよい。」

「私は以下の結果を得るだろう。政府は前線に送る数人の従者をこれら頑固な鍛冶屋、農民、職人、機械工、鍵屋、釘師、労働者の息子たち2万人に置き換える。次に、2万人ものこれら税関職人が健康に、よい気分で過ごせるよう、政府は25万フランを彼らに支給する。源泉はあの鍛冶屋、釘師、職人、労働者たちだ。前線はより強固に防衛されるだろうし、私は一銭も使う必要がない。私はやり手の仲介人に直面することなく、鉄を自分が決めた値段で売り、偉大な同胞が煙に巻かれる様子を見て満足に浸るだろう。彼らは永遠に、自分たちはヨーロッパの発展の前触れを告げたり、推奨するだけに留まることを思い知らされるだろう。（発展の話題は）死刑に値する冗談になる。裁判にかけられても仕方ないだろう。」

そういうわけでミスター・禁止氏は立法府へ赴いた。別の機会に、私は彼の裏取引について語るかもしれないが、今は彼の表立った行程を述べるだけにしよう。彼は立法府の役人の前に、以下の理由を申し立てた。

「ベルギー製の鉄がフランスで10フランの価格で売られています。私は同じ値段で売る以外方法がありません。私は15フランで売りたいのですが、ベルギー製の鉄のせいでそれはできません。全く、紅海の底にでも沈んでいてほしいものです。ベルギー製の鉄をフランスに持ち込むことを禁止する法律を作っただけませんか。私は直ちに価格を5フラン上乘せし、その結果以下の結果が得られます。庶民へ供給する鉄について、同じ重さで私は10フランではなく15フラン受け取ります。私はすぐ

に金持ちになり、販路を広げ、より多くの労働者を雇います。私と従業員は以前よりずっと多くのお金を消費し、周り一帯の商人はたいそう喜びでしょう。これら商人たちは常連客を増やし、より多くの人間を雇って商いを行うので、国全体では私たちと商人たちの両方の側で経済活動が活発化することになります。幸いなことに、あなたたちが私の金庫に入れるお金は、湖に投げ入れられた石のように、無数の波及効果を生み出すのです。」

彼の主張に魅せられ、実行が容易であることに元気づけられ、立法府の役人は規制を可決し、人々の繁栄を法の管理下に置いてしまう。彼らは言う。「労働と経済について言えば、法令を使うだけで国の富を増やせるのであれば、わざわざ苦勞する必要がどこにあるのだ？」

実際、法によりミスター・禁止氏の言う通りのことが起こる。ただ一つ気になるのは、彼が予期していなかったことも起こるという点だ。公正を期すならば、彼の主張は間違っているわけではない。足りないだけだ。特権を得るために、彼は目に見える効果を取り扱い、目に見えない効果は背景に置き去りにした。彼の話には二人の登場人物がいるが、実際には三人目の人物がいる。無意識に、あるいは意識的に忘れられてしまったこの人物について語るのが私たちの役目だ。

法によってミスター・禁止氏の金庫に入れられるクラウン金貨は彼自身と新たに生まれる仕事の機会にとって有利に働くのは確かだ。もし、法令がクラウン金貨を月から降らせるように計らったのであれば、好ましい結果が対応する悪影響によって打ち消されることはないであろう。残念なことに、この謎のお金は月から降ってくるわけではない。鍛冶屋、釘師、車大工、蹄鉄工、労働者、船大工の懐から出るのだ。つまり、今や10フラン払っても鉄を多めに得られないジェームズ・Bが払うのだ。それゆえ、この件の構図ががらりと変わる様子が視界の隅に映るだろう。ミスター・禁止の利益はジェームズ・Bによって賄われていることは明白であり、ミスター・禁止がクラウン金貨を使ってやろうとしていること、すなわち仕事の機会の増加は、ジェームズ・Bが自身で行えることである。石は湖の一方にしか投げ入れられていない。なぜなら、法律によりもう一方へ投げ入れることが禁止されたからだ。

つまり、目に見えない結果は目に見える結果に取って代わられてしまい、今や残ったのはその残骸である一片の不正行為だけだ。そして、それは法律によって施行された不正なのだ！

それだけではない。私は少し前、背景に取り残された第三の登場人物がいると言った。彼を表舞台に上げなければならない。彼はさらにもう5フランが失われていることを見せてくれる。それにより、私たちは取引の結果を全て見渡せるのだ。

ジェームズ・Bは15フラン持っており、それは彼の労働の結果得られたものだ。彼は自由に振る舞える。15フランで彼は何をやるのだろうか？彼は何着かの衣類を10

フランで購入し、それを使って(あるいは仲介人を經由して)ベルギー製の鉄を買う。結果、彼には5フランが残される。川に捨てる代わりに、(ここからが目に見えない結果だ)彼は自分の楽しみのために別の商人にお金を渡す。たとえば、ボシュエの「世界史叙説」を本屋で買うなどするだろう。

仕事の機会について言えば、15フラン分が生み出されたのだ。パリの衣類に10フラン、本屋で5フランだ。

ジェームズ・Bについて言えば、彼は15フランにより二つの満足を得たのだ。

第一：鉄の塊

第二：本

法が執行されたとする。ジェームズ・Bはどのように影響されるだろうか？仕事の機会はどうなるのだろうか？

ジェームズ・Bは5フランを全てミスター・禁止に払うことになり、それゆえ本を読む満足や、あるいは他の同等な価値を得られなくなる。彼は5フランを失う。ここまでは認めるべきだ。規制により物価が上昇すると、消費者が差分だけ損をするということは認めざるを得ない。

しかし、仕事の機会は増えるのだ。と、巷では言われている。

いや、増えてなどいないのだ。執行の後に、15フランが以前より額を増やしたことにはならない。

唯一の違いは、執行後はジェームズ・Bの15フランは鉄の売買に消えてしまい、執行前であれば服飾業者と本屋にて消費されていたという点だ。

ミスター・禁止が前線で行使する、あるいは彼を通じて法律が行使する暴力行為は、道徳観が異なればかなり違って受け止められるだろう。法律によって許されているならば、略奪行為は完璧に公正であると見なす人もいるだろう。しかし、私自身にとってはこれ以上憤りを覚える行為を想像すらできない。どちらにしろ、経済的な影響は同じだ。

好きなように物事を判断すればいい。しかし、あなたが公平であるなら、合法的な、あるいは非合法的な略奪行為からは何もよい結果が生まれないことが見えるはずだ。ミスター・禁止や彼の商売、あるいは国の産業が、5フラン分得をすることは否定しない。しかし、10フランの代わりに15フラン払うことになったジェームズ・Bと価格差を享受できない他の産業に対して、二重に損が発生していることも確かだと、私たちは知っている。この損失のうち好きな方を選び、私たちが得る利益で相殺してみよう。残った分が、無駄損だ。教訓はこうだ。暴力によって奪う行為は生産ではな

く、破壊だ。もし暴力行為が生産につながるのであれば、私たちの祖国は今よりもっと豊かになっているはずではないか。

## VIII. 機械

「機械に災いあれ！毎年、機械の力が増すにつれ、多くの労働者が仕事を失って給料と食べ物を失い、貧困に追いやられている。機械に災いあれ！」

これが粗野な偏見に支えられ、新聞に反映されている叫び声だ。

しかし、機械を呪うことは、人間の魂を呪うことになるのだ。

いったいそのような信条を用いて誰か満足する人間がいるのか、私にはわからない。

もしそれが本当なら、いったいどういう事態になるのだろうか？ 様々な活動や、繁栄や、富や、幸せを得ることは誰にも不可能になる。愚かで、鈍い人間たち、あるいは自分で考え、観察し、組み合わせ、発明し、最小の努力で最大の結果を得るといった困った能力を神から与えられなかった人間を除けば。鉄、火、風、電気、磁気、化学反応や機械工程を利用する国家、つまり、本来の自然の力に注目し、自然の力をさらに大きく活用しようとする国家には、ぼろ切れ、あばら屋、貧困、飢餓が待ち受けるだろう。私たちもルソーと同じように、こう言うべきだろう。「考える人間は全て、退化した動物である。」

それだけではない。全ての人間は自分でものを考え発明を行い、己がこの世に存在する間は、最初から最後まで自然の力を引き出そうとする。最小の労働で最大の満足を得るために、自らの仕事量や出費を可能な限り減らす。先に挙げた信条が正しいければ、当然の帰結として、進歩を望む精神が、同時に人類全体を衰退へ向かわせるのだ。そのような精神は各人を苦しめるだけなのだから。

それゆえ、ランカシャーの住人が機械が増えすぎた（それゆえ仕事の機会が減った）社会を捨て、機械があまり存在しないアイルランドに職を求めているという推計は広く知られるべきである。ただ、歴史に学ぶのであれば、野蛮な考えは文明の時代に影を落とし、そして文明こそが無知と野蛮さの時代に光を照らしている。

この巨大な矛盾には明らかに私たちを反発させる何かが潜んでいる。ゆえに、まだ十分に焦点が当てられていないだけで、この問題は解決法も同時に含んでいるのではないかと私たちは疑うことになる。

謎はこういうことだ。目に見えるものの裏に、目に見えないものが隠れているのだ。私はそれを日の当たる場所に出してみよう。ただし、ここで私が提示する例は前のたとえの繰り返しでしかない。問題は一つしかなく、従って結局同じことだからだ。

人は邪魔をされない限り、利益が最大になるように行動する癖が自然に身に付いている。つまり、自身の労働から可能な限り多くを得ようとするわけだ。利益の出所が外国人を使うことだろうと、熟練した機械工を使うことだろうと変わりはない。

どちらの例においても、この（利益を最大化する）性癖に対しては同じ考え方で反論がなされる。明らかに休んでいるものを、仕事に駆り出しているとされるのだ。実際は、休んでいるかどうかではなく、利用できるかどうかで決まる。ゆえにどちらの例においても、強制力という名の実用的な禁則が適用される。法の執行者が、外国の労働力を使うことや機械に頼ることを禁止するのだ。人間の自由を奪うことで、人間に本来備わっている性癖を罰する方法が他にあるだろうか？

確かに、多くの国では法の管理者が競争相手の一方のみを罰し、もう一方には文句を言うだけで終わるのは事実だ。これが意味することはただ一つ、法の管理者は一貫性がないということだ。

守れない約束をすることの害

驚くには値しない。間違った道を歩き始めれば、一貫性がなくなることは避けられない。そうでなければ、人類の発展が阻害されるだろう。間違った原則は最後まで実行されることはなかったし、これからもないだろう。

さて、例を提示してみせよう。それほど長くはかからない。

ジェームズ・Bは2フラン持っており、労働者を二人雇える。しかし、彼はロープと重りを組み合わせることで仕事量が半分に減ることに気づいた。それゆえ、彼はそれを利用して1フラン節約し、労働者を一人解雇する。

彼は労働者を解雇する：これが目に見える結果だ。

それだけを見ると、以下のような意見が出る。「文明の進歩がどれだけみじめさをもたらすか見るがいい。自由は不平等をもたらすのだ。進歩的な方法を考え出したおかげで、直ちに一人の労働者が貧乏の谷底に突き落とされたのだ。ジェームズ・Bはそれでも二人の労働者を雇うことはできるだろうが、今や彼らに半分の賃金しか出さず、それを巡って二人は争うことになり、より低い賃金で働くことを申し出るだろう。ゆえに金持ちはいつも富を増やし、貧乏人はいつも損をする。社会は変革を必要としているのだ。」よくできた結論であり、前置きにする程度の価値はある。

幸いなことに、前置きと結論はどちらも間違っている。なぜなら、目に見える事象の反面には、目に見えないもう片方の事象があるからだ。

ジェームズ・Bが節約した1フランも、節約の必然的な効果も、目には見えない。

発明の結果、ジェームズ・Bは利益を確定させるために、労働に1フランしか払わない。もう1フランは彼の手元に残る。

つまり、この世界に仕事にあぶれた労働者が存在するならば、使われないままの1フランを持つ資本家もまた存在するのだ。これらの要素は対なのだ。昼と夜や、労働の需要と供給や、賃金の需要と供給と同じように、その関係性を変えることはできない。

今や、最初の1フランで雇われた労働者が発明を利用して仕事を行う。以前は二人の労働者で行っていた仕事だ。2フラン目で雇われていたはずの労働者は、別の仕事をするようになる。

だとしたら、一体どんな変化が起こったのだ？国にとって、新たな利益が発生したのだ。つまり、発明により無償で勝利が得られ、人類にとって無償で利益が得られたのだ。

私が提示した考え方から、以下の推論が導かれるかもしれない。「機械から利益を得られるのは資本家だけだ。労働者階級は一時的に被害を被るだけで、得になることはない。あなた自身が提示した考えによると、機械による便利さは確かに国民の仕事を減らすことはない。移すだけだ。しかし、増やすこともないのだ。」

私はこの論文で全ての反論に応えるつもりは毛頭ない。私の目的はただ一つ、広く行き渡っている粗野で危険な偏見と闘うことだ。私は、機械により報酬が奪われ、仕事の機会が無くなる事態はそれほど多くないと証明するつもりだ。失われた仕事と報酬を合わせれば、機械の発明が行われる以前では不可能だったことが成し遂げられるだろう。そこから言えるのは、結果的には同じ量の仕事でより多くの利益があげられるということだ。

利益の増加の恩恵を受けるのは誰だろう？

まず、機械を発明した資本家が恩恵を受けるのは確かだ。彼は最初に機械を使い始めた者であり、それは彼の聡明さと勇気の見返りなのだ。この場合、これまで見てきたように、彼は生産力の増加にあわせて節約を行い、その余剰を好きなように使える（そして、彼は必ずそれを使う）。彼は機械により職を失った分の労働者を新たに雇うことになるのだ。

しかし、競争相手の出現により彼はそのうち余剰分の価格を下げる必要が出てくる。その際、発明の恩恵を受けるのは発明者ではない。生産物を購入する顧客、消費者、大衆だ。そこには労働者も含まれる。一言で言うと、人類全体だ。

目に見えないのは、余剰は全ての消費者にもたらされ、それゆえ賃金の源泉が増えるという点だ。機械により失われた仕事を補うことになる。

それゆえ、以前に提示した例に戻ると、ジェームズ・Bは賃金に2フラン使って利益を得ていたが、自身の発明のおかげで労働者に1フラン払うだけで済むようになる。出来上がったものを同じ値段で売り続けるのであれば、雇う人間を一人減らすことができる。これが目に見える結果だ。しかしジェームズ・Bが節約した1フランで、新たに雇われる人間が出現することになる。これが目に見えない結果だ。

自然な段階に沿って、ジェームズ・Bが1フランで生産可能なものの値段を下げる必要が生じた場合、彼は余剰なお金を失う。彼はもう、消費したり、新たに労働者を雇って生産できる1フランを持たないのだ。しかし、別の者一人間が彼の代わりに恩恵を受けることになる。彼が生産したものを買う者は1フラン少なく払うため、節約した分を賃金の源泉を増やすことになる。これが、繰り返すが、目に見えない結果だ。

この機械に関する問題については、実例に基づいて、別の解決法が見つまっている。

機械は生産経費を節約し、生産物の価格を引き下げるとされた。利益分が少なくなるので、消費が活発化し、生産はさらに増え、結果として発明の前に必要だった人数より多くの労働者が雇われることになる。証明のために、印刷や機織りの例を挙げるのが可能だろう。

私の提示は科学的なものではない。よって、ここで扱っている生産物の消費が伸びないのであれば、機械は単に仕事の機械を奪うだけだと結論づけられる可能性がある。しかし、そうはならない。

ある国では全員が既に帽子をかぶっているとしよう。この場合、もし機械の導入により帽子の価格が半減するとしても、消費が二倍になるとは限らない。

あなたは、この場合国民の仕事の機会が失われると言うだろうか？粗野な考え方をすればそうだろう。しかし、私の考えによると、否だ。もしその国で帽子が一つも新たに買われなかったとしても、賃金の源が減るということにならない。帽子生産に携われなくなった者は消費者全員で形成された経済社会に戻り、そこでは機械の導入により不要とされた労働者に賃金を支払って新たな事業の開始が促されることになる。つまり、事態は前進するのだ。私は新聞がかつて80フランしたのを知っている。今や48フランだ。購読者が32フラン得をしているのは確かだ。その32フランが報道業界で使われる必要があるかどうかは、わからない。しかし、そこで使われなければ別の場所で使われることになるのは確かだ。ある人はもっと多くの新聞を購読するだろう。別の人は人生をより豊かにし、さらに別の人はより多くの衣服や家具を買うだろう。ゆえに、全ての商業はお互いと繋がっている。それらは巨大な全体像を形成し、各自は目に見えない経路で結ばれている。それら要素をつなぎ止める共通項はただ一つ、利益だ。節約は仕事の機会や商品を犠牲にして生まれているわけではない、ということを理解しておく必要がある。



## IX. 借金

いつの時代でも、そして近年は特に、借金を増やすことで富を増やそうとする試みがなされてきた。

この方法で社会問題を解決しようと呼びかけるため、二月革命以来、パリの新聞は一万枚以上のパンフレットを刷ったと言っても過言ではないと私は信じている。この解決法の唯一の根拠（ああ！）は幻覚だ：もし幻覚を根拠と呼べるのであれば。

まず行われることは、物を金額と取り違え、次に行われるのは金額を紙幣と取り違えることだ。この二つの誤解のせいで、あたかも実体が無から生み出せるように思われてしまう。

この問題においては、お金、貨幣、紙幣など、物を流通させる手段を頭から追い払うことが絶対に必要だ。私たちが扱うのは借金の本当の対象物なのだ。ある農家がすきを購入するために50フラン借りるとき、彼に実際に貸し出されたのは50フランではなく、すきなのだ。ある商品が家を購入するために2万フランを借りるとき、彼が返済しなければならないのは2万フランではなく、家なのだ。お金は二者が合意に達するのを助けるための存在にすぎない。

ピーターはすきを買う余裕は無いが、ジェームズが自分の金を貸してもいいと考えている。ウィリアムはどう振舞うのか？彼はジェームズの金を借り、その金でピーターにすきを買って与えるのだ。

しかし、実際には、お金自身のためにお金を借りる人間はいない。お金は物を所有するための媒体でしかない。さて、元から存在する以上の物を人の間でやりとりすることはどんな国においても不可能だ。

貨幣や紙幣がどれだけ流通していようとも、借り手は貸し手が準備できる以上のすき、家、道具、原材料を受け取ることはできない。どんな借り手も貸し手の存在を前提とし、貸し借りには支払いがつきまとうことを忘れてはいけない。

以上の前提で、貸し借りを取り扱う業者にどんな価値があるのだろうか？彼らは借り手と貸し手を探し出し、お互いを引き合わせることで仲介を行う。しかし、彼らには貸し借りの対象物を直ちに増やす力はない。それにも関わらず、改革主義者たちはその力があるという前提で、目的を達成するとしている。改革主義者はすき、家、道具、配給物を欲しい人間全てに与えることを目指しているからだ。

では彼らはどうやってそれを実現するのだろうか？

国が借金の保証人になるのだ。

このことについて考えてみようではないか。目に見えるものも、目に見えないものも、どちらの要素も含んでいるからだ。どちらも観察しなければならない。

世界中ですきが一つのみ存在し、二人の農民がそれを欲しているとしよう。

すきはフランスにあり、ピーターが持ち主である。ジョンとジェームズがそれを借りたいと望んでいる。ジョンは正直さと、資産と、良い評判を携え、担保を申し出る。彼は自信にあふれ、信用がある。ジェームズは自信を全くといていいほど持たない。自然と、ピーターはジョンにすきを貸し与える。

しかし、社会主義者の思惑によると、国家がそこに介入し、ピーターに対してこう言う。「すきをジェームズに貸したまえ。私が支払いの保証人になろう。私の保証はジョンより安全だ。彼は自分以外に頼るものがない。私自身は確かに何も持っていないが、納税者の資産を使えるし、必要であれば、彼らのお金を使って原本と利息を払うことができる。」もちろん、ピーターはジェームズにすきを貸すことになる。これが目に見える結果だ。

社会主義者たちはもみ手をしながらこう言うだろう。「見たまえ、我々の期待が応えられただろう。国家が介入してくれたおかげで、かわいそうなジェームズがすきを得られたのだ。彼は土を手で掘る必要がなくなる。財産を築くことができるのだ。彼にとって良いことだし、国家全体にとっても利益になる。」

諸君、実際にはそのようなことはありえない。国家は得をしないのだ：目に見えない要素があるおかげで。

目に見えていないのは、すきはジョンの手に渡っていないからこそ、ジェームズの手に渡ったという点だ。

目に見えていないのは、ジェームズが手で掘ることから解放され、すきで耕すことができるようになれば、ジョンがその代わりに手で掘ることを余儀なくされることだ。

つまり、貸し借りが増加したかのように見えたのは、実は貸し借りを移しただけだったということだ。さらに、この移動には二つの深刻な不正が隠れていることも見えていない。

まず、正直さと己の行動によりお金を借りることができたジョンから、その借りた金をはぎ取ることで、彼に対して不正を働いている。

次に、納税者に赤の他人の借金を肩代わりさせることで、彼らに対して不正を働いている。

政府はジェームズだけでなく、ジョンに対しても同じ道具を貸し与えた、と言う人はいるだろうか？すきはたった一つしかなく、同時に二人に貸すことはできないのだ。

議論されるのは常に、国の介入によってより多くの方が借金できるようになるという点だ。そこでは、すぎが借金可能な金額を代表している。

確かに私は全体の構図を最も単純化しているのだが、仮にあなたが最高に複雑な政府の貸与担当部門に同じ課題をあてはめても、結果は一つしかありえない。借金は移動するだけで、増えはしないのだ。どの国においても、一度に利用できる資金の量には限りがあり、皆使い道が決まっている。国は確かに、お金を払えない人々を満足させるために借り手の数を増やすことができる。その結果利息が増えることになるのだが（そして被害を被るのはいつも納税者だ）。しかし国は貸し手の数を増やすことはできないし、借金の総量は一定という重要な法則を覆すこともできない。

しかしながら、誰も予想していない結論を引き出してみよう。私は法律を用いて借金する能力を人工的に増やすことには反対するが、人工的に抑制することについてはそうは思わない。ただし、貸し付けの制度内、あるいはどの制度においても、借金を申し込む権利が行き渡らないのであれば、その障害物は無くさねばならない。それ以上に重要なことは他にない。これは自由の大切さと一貫しており、およそ改革を支持すると見なされる人間全員にとっての全てなのだ。

## X. アルジェリア

4人の演説家が演壇で議論を交わしている。最初に全員が一度に喋り、後に各自が順番に喋る。何を話しているのだろうか？確かに立派なことが語られている：フランスの雄大さと権力について、収穫を得るためには種を撒いておく必要があることについて、我々の巨大な植民地の輝かしい未来について、余剰な人口を遠隔地へ送ることの利点について、等等だ。見事な雄弁さであり、常にこの結論で最後を飾られている。「約5千万フランを、アルジェリアの港や道路を整備するために出費することに賛成の票を入れよう。こちらから移民を送り込み、家を建て、土地を分割するためだ。そうすればフランスの労働者は活気付き、アフリカでの就労が活発化し、マルセイユの交易も盛んになるだろう。どの方面においても、得をするはずだ。」

その通り、全て正しい：国が実際に使い始める時点まで、5千万フランを無視すれば。出費がどこへ行くのかのみ着目し、どこから来たのかを考慮しなければ。回収した税金を使って良いことを行う点にのみ集中し、回収までに行われた損害を考慮しなければ。そして、税金を払うことで失われた機会を無視すれば。そうした狭い視野の元では、全てが儲かっている。バーバリーに建てられる家も、バーバリーに作られる港も、バーバリーで生まれた仕事も、フランスで減らすことのできた人口も目に見えるものであり、マルセイユに溢れる貨物ですらそうだ。

しかしその傍ら、目に見えないものが存在する。国が消費する五千万フランは、本来のように、納税者が使えるわけではない。公共出費の善から、個人消費を抑制するこ

との悪を全て差し引かなければいけないのだ。ジェームズ・Bが、税金がなければ得るはずだった賃金を何に使うこともない、という馬鹿げた仮定をすれば別の話だが。彼がお金を得たのであれば、それは自分を満足させるためだ。彼は庭の柵を修繕したかもしれないが、それは今や不可能な話で、よって目に見えない結果だ。畑に肥やしを撒くだろうが、これもまた不可能であり、よって目に見えない結果だ。小屋を増築したかもしれないし、道具を増やしたかもしれない。それも不可能で目に見えない結果だ。よりおいしいものを食べることも、より心地よい衣服を着ることも、子供たちによりよい教育を施すことも、娘の結婚祝いの額を増やすことも、目に見えない結果になってしまう。相互扶助の組織の一員になれたかもしれないが、それも不可能で、目に見えない結果だ。一方には、彼が楽しむことなく奪われた快樂や、彼が手にすることなく破壊された機会がある。もう一方には、配管工、大工、鍛冶屋、仕立て屋、村の校長先生など、彼から仕事を獲得する機会を奪われた人々がいる。これらは全て、目に見えない結果だ。

アルジェリアの将来は大いに期待されている。それはそれで良い。しかしそれによりフランスが被る損失は心の隅にとどめておくべきである。マルセイユの交易が挙げられたが、その増加が税金により得られるのであれば、私はいつでも、おかげで国の他の地域で同じ量の交易が失われているのだと見せてみよう。また、こう言われている。「バーバリーへ移民する人間がいれば、国に残された者たちが助かる。」私はこう答えよう。「その人間をアルジェリアに移民させることにより、彼をフランスに残す経費の2倍や3倍の資金を一緒に移動させていることになるとしたら？」

防衛大臣は最近、アルジェリアに移送するには一人につき8千フランかかる、と発表した。間違いなく、哀れな彼らは4千フランの経費でフランスにて幸せに住み続けることができたはずだ。私の問いはこうだ：二人分の費用を払って、一人の人間を奪い去ることが、フランスの国民にとってどう助けになるのだ？

私が目指す目標はただ一つ、全ての公共支出の明白な利益の裏に、不明瞭な悪事がひそんでいと読者にわからせることだ。自分の力の及ぶ限り、私は読者に両方の側面を見せ、どちらについても考慮してもらおうつもりだ。

公共出費が提案される時、結果として増加するとされている仕事の機会は実は幻想であるがゆえに、一旦距離を置いてから出費自体を吟味するべきだ。公共出費について行うのであれば、同じことを個人消費についても行う必要がある。そうすれば、仕事の機会の増加は検討要素に入ってくることはないだろう。

本論文の目的はアルジェリアへの公共出費の本質的な価値について批判することではない。それでも、私自身の全体的な感想は述べずにはいられない。私は徴税を通じて費用を得ることについては常に反対の立場をとっている。なぜか？以下の理由からだ。まず、必ず公正度をいくらか欠くことになる。ジェームズ・Bは満足を得るためにお金を稼いだのに、財務省が介入してその満足を取り上げ、他の人間に授けるのは

誠に残念な話だ。もちろん、その行為を正当化するのが財務省、またはその監督者の義務である。国家は「このお金を使って労働者を雇えるのだ」と挑発的な回答を返すことがわかっている。それに対して、ジェームズ・Bは（もし彼がそれを聞いたならすぐに）こう答えるだろう。「それは結構なことだ。だが、私はそのお金を使って自分自身を雇いたい。」

この点以外の要素は実体をごまかすこと無く出現するので、哀れなジェームズ・Bと財務省との議論はかなり単純なものになる。もし国が彼にこう言ったとしたらどうだろう。「私たちは君のお金を使って憲兵を雇う。彼は君の代わりに君の資産を守ってくれるだろう。私たちは君が毎日通る道を整備する。君の資産と自由を保障できる判事を雇う。国境を警備する兵隊を雇う。」私が全く勘違いしていない限りは、ジェームズ・Bは躊躇することなくそれらの費用を払うだろう。だがもし国が彼にこう言ったとしたらどうだろう。「私たちは君のお金を使い、君が自分の畑をよく耕した際に君に褒美を贈ろう。君の息子に、君が望まない教育を施そう。大臣の豪華な夕食にもう一品料理を追加しよう。アルジェリアに小屋を建てよう。移民を住ませるので、毎年さらにお金を払ってもらわなければならない。移民を守る兵隊の費用も、兵隊を監督する将官の費用も。。。」私にはかわいそうなジェームズがこう叫ぶのが聞こえる。「この法制度はまるで詐欺の制度だ！」そして国はこう言われるのを予期している。どうするかって？全てをかき集め、問題そのものを切り離して挑発的な発言だけに注目する。国は彼のお金が仕事の機会をどう増やすか、語る。大臣の料理人や御用業者、移民、兵士、将官が彼のお金のおかげで生活できることを見せる。国が見せるのはその実、目に見える結果であり、ジェームズ・Bが目に見えない結果を考慮することを学んでいなければ、彼は騙されてしまうだろう。だからこそ、私は繰り返しこのことを述べ、全力で彼にわかってもらいたいと願っている。

公共出費は仕事を増やさずに、他へ移すだけなので、もう一点、深刻な矛盾を内部に抱えている。仕事を移すということは労働者を移すということであり、国の人口を広める自然な流れを攪乱してしまうのだ。5千万フランが納税者のものであり続けるのならば、彼らは国の至る所に存在するために、フランスに存在する4万の教区に仕事の機会を提供できるだろう。全ての人間を自然な形でつなげるため、誰も生まれ故郷を離れる必要はなくなる。想像しうる限りの労働者や交易を、お互い同士で分配できるのだ。もし国がこの5千万フランを市民から奪い、貯めておき、ある時点で使うのならば、額に応じて仕事の分配や労働者の移動が起こるだろう。本来いる場所から人口の移動が起こり、私に言わせれば、資金が底をついた際には危険な事態に発展する。これが引き起こされる結末であり（しかも、私が述べてきた内容と一致する）、この馬鹿げた行動は、あたかも狭い空間に押し込められたかのようだ。皆の注目を集めている。これが目に見える結果だ。人々は拍手喝采し、計画の美しさと実用性に舌を巻き、それが続行され、拡大されることを望む。人々に見えないのは、本来もっと貴重であろう仕事の機会が、同じ量だけフランスの他の地域で失われていることだ。

## XI. 儉約と贅沢

目に見えるものが見えないものを覆い隠してしまうのは公共出費にとどまらない。政治経済を抜きにしても、その習慣は誤った論拠を導きやすい。道徳と実利主義は互いに矛盾する、と国家が見なしてしまうのだ。これ以上に私たちを落ち込ませたり、暗い気持ちにさせることがあるだろうか？

例えば、どんな家庭の父親でさえ、自分の子供たちに秩序、流儀、慎重な態度、節約の習慣、そしてお金を注意深く使うことの教育を己の義務としてとらえている。

あらゆる宗教は、虚飾と贅沢を厳しく戒めている。それは当然だろう。その一方で、以下のような発言を何度我々は耳にしてきたことだろう：

「ため込むことは、人々の命脈を断ち切ることだ。」

「強者の贅沢は弱者の快樂である。」

「浪費家は自らを滅ぼすが、国を豊かにする。」

「金持ちの無駄遣いにより、貧乏人が生きる糧を得られる。」

間違いなく、道徳と社会で広まっている考え方の間に深い矛盾が生じていることが見て取れる。

数多くの高名な方々が、上記のような主張を行った後でなお、安らかに休息できているようだ。私には一生理解できないだろう。人の内面に二つの相反する傾向を発見すること以上に、苦悩することがあるとは思えないからだ。どちらの極端に振れても、悲惨な結末を導き出すのはなぜだ？節約は不幸を招き、浪費は道徳の欠如を招くだと？幸いにも、これらの俗物的な格言は、目に見える直接の結果を考慮し、目に見えない遠い結果を考慮しないおかげで、節約と贅沢を間違っただけで解釈しているのだ。この一面的な見方を是正できるかどうか、試してみよう。

モンドールと彼の弟であるアリストスは、両親の遺産を分割してそれぞれ5万フランを手に入れたとしよう。モンドールはきらびやかな慈善活動に邁進する。彼はいわゆる浪費家だ。家具を一年に数回買い替え、身の回りの品を毎月新しくする。彼の独創的な計略は、思ったより早く終わりを迎えるだろう、と人は噂する：実際、彼はバルザックやアレクサンドル・デュマのような道楽者の上を行っている。

それゆえ、誰もが彼に賛辞を送る。「モンドールについて知りたいだって？モンドール万歳！彼は労働者の恩人で、庶民への贈り物だよ。確かに、彼は消費することに生きがいを感じている。通りすがりの人にまで振舞うくらいだ。彼は尊厳を失っており、人間的に低俗かもしれない。でもそれがどうしたと言うんだ？彼は自分自身はともか

く、自分の財産をうまく扱っているじゃないか。彼はお金を流通させ、商人達をいつも満足させている。貨幣は天下の回り物であるからこそ、丸く作られているんだろう？」

アリストスは全く異なる人生計画を選んだ。彼は傲慢なのではなく、あらゆる意味で個人主義なのだ。注意深く出費を行い、ほどほどで理にかなった楽しみ方のみ追い求め、子供たちの将来を考慮している。そして、彼は本当に倹約を行っている。

彼の評判はどうなのだろう？「彼のような金持ちのどこがいいんだ？彼は守銭奴だ。恐らく質素な生活のせいで、どこか押し付けがましい感じがする。人道的で、親切心を持ち、気前が良いが、計算が細かい。自分の収入を使おうとしないし、家は豪華でも賑やかでもない。彼は表具師や、馬車職人や、馬商や、菓子職人に何かいいことをしているのか？」

これらの道徳心が著しく欠如した意見は、目に飛び込んでくる事象を見て生み出されている：浪費家の出費だ。それと同等か、もしくはそれより上等である倹約家の出費は視野に入っていない。

しかし、社会の秩序を生み出した天の采配は見事なもので、他の全ての例と同様、この件においても、政治経済と道徳は、衝突するどころか調和にいたるのだ。アリストスの智慧は、モンドールの愚行に比べ、より尊厳に満ちているだけでなく、より多くの利益を得られるのだ。私が利益を口にするとき、私はアリストスのみや、はてまた社会一般ですらも、対象にしていない。労働者自身が現在行っている仕事にもたらされる利益について語っているのだ。

このことを証明するには、心の眼を用いて、人間の行いによって生み出された、隠れた結果を見るだけでいい。眼球に頼っては見るできないものだ。

モンドールの浪費はどの角度からでも見てわかる。誰でも、彼のランドー馬車、フェートン馬車、ベルリン馬車、天井の凝った絵画、高価な絨毯、家のきらびやかな装飾に気づくだろう。誰もが、彼の馬は芝生の上を駆け上がることを知っている。彼がホテル・ドゥ・パリで開催する夕食会は大通りを歩く人々の興味を引いて回る。そして、「彼は寛大な男だ。収入を貯蓄するどころか、資産を切り崩しているようではないか。」これが目に見える結果だ。

労働者にとって、アリストスが何で収入を得ているのか理解するのは難しい。しかし、注意深く追っていけば、その全てが、最後の一文に至るまで、労働者に仕事を提供していることが見て取れるはずだ。モンドールの財産についても同じことが言えるが、一点違いがある。モンドールの奔放な浪費は先細る運命にあり、例外なく終わりを迎える。それに対してアリストスの賢い支出は、毎年増え続けるのだ。もしそうであるなら、ほぼ確実に、大衆の利害と道徳は一致していることになる。

アリストスは彼自身と彼の家庭に年間2万フランを使う。もしそれで満足できないのであれば、彼は賢人と呼ばれる資格はない。彼は貧民階級を覆う苦しさに触れ、良心に従って彼らに助けを施すべきだ、と考える。ゆえに、彼は1万フランを慈善に投じる。彼の友人である商人、職人、農家の中にも、一時的に財政が緊迫している者たちがいる。彼は友人たちの状況を知り、慎重に、かつ効果的に彼らを支援し、そのためにさらに1万フラン使う。しかし、彼は財産を娘たちに分配し、息子たちの将来の為に確保する必要があることを忘れていない。それゆえ、彼は貯えることを義務ととらえ、毎年1万フランを利息付きで預ける。

これが彼の出費の一覧だ：

- 第一：個人的な出費……………2万フラン
- 第二：寄付行為……………1万フラン
- 第三：友人の世話……………1万フラン
- 第四：貯蓄……………1万フラン

各項目を順番に見てみよう。どの支出にも、国の労働者が関わることは見てとれるだろう。

第一：個人的な出費　　これらは、職人や商人にとっては、モンドールが使う同額の出費と全く同じ効果を生む。これは自明のことで、これ以上述べる必要はないだろう。

第二：慈善行為　　この目的で出された1万フランも同じく、商業に利益をもたらす、肉屋、パン屋、仕立て屋、大工に行き渡る。ただ一点注意が必要なのは、パン、肉、そして服は、アリストス自身ではなく、彼が代表する他の人々によって消費されることだ。ある消費者を単に別の消費者と交換することは、商業全体には何の影響も及ぼさない。アリストスが大金を消費しても、他の不幸な誰かに使ってもらおうとも、全て同じだ。

第三：友人の世話　　アリストスが1万フランを貸すか渡す友人は、受け取った金を埋めるわけではない：それは設問の前提と異なる。彼はそのお金で物を買うか、借金を返す。前者の例では、取引の量が増える。誰か、モンドールが1万フランで血統の良い馬を買うほうが、アリストスや彼の友人が1万フラン分の物を購入するより取引を活性化させる、と言い放つ者はいるだろうか？もしこのお金が借金の返済に使われるのであれば、第三者、すなわち債権者が登場する。債権者は商売や、家屋や、農場を通じてお金を工面する。彼はアリストスと労働者の間に新たな媒介を形作るのだ。名前は異なれど、出費の額は変わらず、取引を活性化することに変わりもない。

第四：貯蓄　　さて、1万フランの貯蓄が残された。芸術や、交易や、仕事や、労働者の観点からすれば、モンドールがアリストスよりはるかに優れているように映る。しかし、道徳面から見て、アリストスはモンドールよりいくぶん優れているようだ。



私は偉大な自然の法則の間で発生しているこれらの明らかな矛盾を見るたび、肉体的な不愉快さを感じえず、それは苦痛にすらなっている。もし、人間が利害を損なうか、道徳を損なうかの二者からどちらかを選ばなくてはならなくなったら、未来に希望はない。幸いにも、そうはなっていない。アリストスが経済的にも、道徳的にも優位を取り戻す様子を見届けたい場合は、この勇気が出る格言を理解するだけで十分だ。「節約することは、使うことでもある。」たとえ矛盾しているように聞こえようとも、正しさに変わりはない。

アリストスはなぜ1万フランを貯金したのだろうか？庭に埋めるためだろうか？もちろん違う。彼は財産と収入を増やそうとしているし、このお金はやがて、彼の個人的な満足を満たすために使われるのではなく、土地や家を買ったり、そのために商人や銀行家に手渡すために使われるのだ。上記の例のどれかを使ってお金の流れを追えば確信できるように、商人や貸し手を経由することで、アリストスは彼の兄弟分が家具や宝石や馬を買うのと同じように仕事の機会を増やしているのだ。

アリストスが1万フランで土地を買ったり借りたりする場合、彼はお金を今は消費したくないからそうしているのだ。だからこそ、彼は批判される。

しかし同時に、彼に土地を売ったり貸したりする人間は、1万フランをなにがしかの方法で消費したい、という動機によって動いている。お金はアリストスか他の人間か、どちらかによってどのみち消費されるのだ。

労働者階級にとっては、仕事の機会が増える点についてはアリストスとモンドールの間にたった一つの違いしかない。モンドールは自分のためにお金を使い、それは見ての通りだ。アリストスは一部を仲介人を通じて使っており、傍目にはその結果が見えない。しかし、ある結果の原因を正しく類推できる者にとっては、目に見えない結果は目に見えるそれと同じ程度に確かなものなのだ。これは、どちらの場合においてもお金が流通しており、浪費家や賢人の胸中で止まっているわけではないことから証明される。それゆえ、節約が商業に害を与えると言うのは間違っているのだ。これまで書いたように、節約は贅沢と同じ程度に益をもたらす。

現在起こっていることのみならず、将来を長い目で見渡した場合、より強力に節約の効果が現れることをお見せしよう。

10年が経過したとする。モンドールと彼の財産や名声はどうなっているだろう？モンドールは破産している。毎年社会に6万フランを支出する代わりに、彼は恐らく、社会にすぎる存在になっているだろう。いずれにせよ、彼は商人にとって歓迎すべき存在ではない。彼は芸術や交易の後援者でもない。彼は労働者にとっても、彼が望んで得た子孫にとっても、もはや価値がないのだ。

同じ10年後に、アリストスは収入を運用し続けているだけでなく、彼は支出額を年々上乗せしている。彼は国家の富を増やしており、つまるところ、賃金の出所を支えて

いるのだ。賃金の基金に基づいて仕事の機会が決まるので、彼は労働者階級の報酬を徐々に伸ばしていることになる。もし彼が死ぬことがあれば、彼の理想を教育された子供たちが、文明的で、発展可能な彼の行いを受け継ぐだろう。

道徳の観点からすれば、贅沢より節約が優れているのは議論の余地がない。政治経済においても、誰もがある現象の直接の結果にとらわれず、最後の結末にいたるまでの想像力を働かせることができるのだ、と元気を持って考えてみようではないか。

## XII. 労働する権利、利益を得る権利

「ブレスレン（教会）よ、私に仕事を見つけてください。報酬は好きにしてください」これが労働する権利、つまり初期段階における原始的な社会主義である。

「ブレスレン（教会）よ、私に仕事を見つけてください。報酬は私が決めます。」これが利益を得る権利、つまり第二段階における洗練された社会主義である。

両者とも、目に見える結果に頼って生きながらえている。そして、目に見えない結果によって死に絶えることになるだろう。

目に見えるものとは、労働と、社会的な条件が組み合わさって生まれる利益を指す。目に見えないものとは、同じ条件の労働と利益が、納税者の手に委ねられたときに生じるものを指す。

1848年に、労働する権利は一時的に相反する側面を見せた。それだけで、世論によって労働の権利は台無しにされてしまうことになる。

側面の一つは、国営工場と呼ばれている。もう一つは、一人当たり45サンチーム（半フラン）の負担だ。結果、毎日のように数百万フランがリポリ街から国営工場に送金された。これは権利の公正な側面を表している。

裏面はこうだ。もし多額の金銭が国家金庫から取られてるのであれば、その前に入金が行われていなければならない。公共労働の権利を主張する人間たちが納税者に要求を行う理由がこれだ。

小作農がこう言う。「もし半フラン支払うのなら、着ている服を失うことになる。畑を耕すことも、家を修繕することもできなくなる。」

田舎の労働者はこう言う。「もし都会の労働者が衣服を失えば、仕立て屋の仕事が減ることになる。自分の居場所を整備しないのなら、配管工の仕事が減る。自宅を修繕しないのなら、大工とタイル工の仕事が減る。」

これにより、一つの予算から食事を二度得ることはできないことが証明された。政府が手配する仕事は、納税者の労働によって支えられているのだ。これは、労働する権利の死を意味する。荒唐無稽であり、不正だからだ。にもかかわらず、労働する権利をほんの少し延長しただけの利益を得る権利は、未だに主張されており、勢いを得ている。

自分が社会でどのように役割を果たしているか、保護主義者は恥じるべきではないのか？

彼らはこう言う。「私に仕事を、それも単なる仕事でなく儲かる仕事を、与えるべきだ。私は浅はかに取引を行い、一割の取り分を逃した。もし国民に 20 フランの税金を課し、それを私に与えてくれれば、私は敗者から勝者に変わる。利益は私の権利なのだから、あなたは私に利益を分配する義務がある。」この詭弁家の言い分を聞き、彼を満足するために税金を負担し、誰かが補償を行うかどうかに関係なく取引で生じた損失はいつだって損失なのだということを理解しようとしないうちは、そんな負担を背負うにふさわしいのだと、私は考える。

私が提示した数々の事例を通じて、以下の点を学べるだろう。すなわち、政治経済を無視すると、ある現象の目に見える結果にのみに気をとられてしまうことになる。政治経済に精通することで、あらゆる結果について前もって考え抜き、予測ができるようになる。

私は他の多くの疑問を同じ試金石に通すこともできるが、常に同じ実演を行う単調さをやめて、シャトーブリアンが提唱する歴史の定義を政治経済にあてはめることで幕を下ろそうと思う。

「歴史には、」彼は言う。「二つの結果が伴う：即座に認識される直接の結果と、最初は認知されず、遠いかなたに存在する結果だ。この異なる種類の結果は互いに矛盾することがある。前者は我々の限られた知恵の結果であり、後者は時を経ても変わらない智慧の結果だ。天による采配は、人間が生み出す事象の後に生まれる。神は人間の背後から立ち上がるのだ。天の助言を無視したければするがいい。その行いを認めたくてもいい。与えられた言葉に反論してもいい。事象の背後にある力を決め付けてもいいし、品のない人間が神業と呼ぶ現象に理屈を唱えてもいい。しかし、結果としてなにが成し遂げられたか、見るがいい。道徳と正義に基づいて最初の結果を生まない限り、最後は常に、最初に期待されたものとは反対の結果が生み出されていることが見えるはずだ。」

- シャトーブリアンの死後に発見された手記より

フレデリック バスティーユ (1801-1850)、1850 年 7 月